

令和5年度
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
評価部会

令和6年1月31日（水）

東京都現代美術館

午後 1 時59分開会

中村文化行政専門課長：それでは、皆様お揃いになりましたので、始めさせてもらってよろしいでしょうか。

本日は、お忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

ただいまから令和 5 年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会評価部会を開催いたします。

私は、東京都生活文化スポーツ局文化振興部文化行政専門課長の中村と申します。本日の司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

次に、本日御出席いただきました委員の皆様を御紹介させていただきます。私から向かって左の席から順に御紹介させていただきます。

石井委員でございます。

神山委員でございます。

児島委員でございます。

佐谷委員でございます。

千葉委員でございます。

長門委員でございます。

平野委員でございます。

毛利委員でございます。

続きまして、事務局職員を御紹介いたします。

東京都現代美術館副館長の茂木でございます。

東京都現代美術館事業企画課長の丹羽でございます。

東京都現代美術館事業係長の岡村でございます。

次に、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

一番上にございますのが会議次第、それから資料 1「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会評価部会委員名簿」、資料 2「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」、資料 3「東京都現代美術館美術資料収集方針」、資料 4「令和 5 年度東京都現代美術館収集候補作品一覧表」、資料 5「作家・作品説明書」、評価部会の評価表をお配りしております。

資料に不足等がございましたら、お知らせください。

また、お手元の資料につきましては、現時点で未公開の情報がございましたので、会議終了後、回収させていただきます。

議事に入る前に、当部会の公開について御説明いたします。

本日の議事は、評価対象資料の価格評価に関するものですので、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱第10に基づき、非公開といたします。

なお、当部会の議事録については、同要綱第10第 2 項に基づき、資料収集決定の後、委員の皆様の個別の価格評価を除き公開を予定しております。公開に当たって、委員の皆様

には追って内容の確認をさせていただきます。

また、委員の皆様のお名前と現職名は東京都のホームページ上にて公開しております。

それでは、議事に入ります。

事務局から、収集作品の説明をお願いいたします。

まず、収集作品の説明をお願いいたします。

茂木副館長：収集作品について御説明いたします。

本日、評価をお願いする作品は、購入14件、寄贈6件でございます。

これら作品の収集については、コレクション部会で収蔵することが適切であるという御意見をいただいております。作品の詳細は、事業企画課長の丹羽、事業係長の岡村及び担当学芸員から御説明いたします。

丹羽事業企画課長：では、まず資料3「収集方針」を御覧ください。

こちらは特段変更ございませんけれども、首都東京、国際都市東京の美術館としてふさわしい現代美術の美術作品資料を収集していくというものでございます。また、コレクション展示の一層の充実を目指すものでもございます。

そして、こちらの2の(2)に書いてございます収集分野につきましては、後ほど資料4、5などで出てくる記号と併せて御覧ください。

裏面にまいりまして、収集の購入に関する方針でございます。こちらのほうも変更ございません。これまでにコレクションございますので、そちらを保管すること、そして現代美術というものを俯瞰して見たときに、その系譜などがたどれるようにすること、そしてコレクションのこれまでのジェンダーバランスなども是正するように、バランスよく購入していくこと、地域などについてもそういったバランスを心がけることなどが書いてございます。

この後、資料4、5の説明をこちらのお部屋でさせていただきますして、場所を移動して作品の実見というふうにさせていただきますと思います。

今年度の収集の重点ポイントといたしましては、若手作家、若手と申しましても当館の1990年代欠落している部分の中堅の作家のフォローアップも含みまして、いわゆる若手作家の収集を重点的にいたしました。また、女性作家のパイオニア世代、戦後の作家さんの世代の収集というものも、ジェンダーのアンバランスを解消するよう心がけて、今回重点としております。

また、既に収集している作家の、ベテランの作家のものであっても、収集の補完となるようなもの、そしてその時代をまた俯瞰して見たときに、その前後の時代、その後の系譜というものがたどれるようなものというものを集中して収集の事項とさせていただきます。

それぞれの作品の概要につきましては、事業係長の岡村のほうから御説明申し上げます。

岡村事業係長：それでは、私のほうから収集候補作品について概略を御説明させていただきます。

お手元の資料4「収集候補作品一覧表」と、資料5「作家作品説明書」を併せて御覧ください。通し番号で1番から14番までが購入作品、15番以降が寄贈作品になります。

まず最初に、1番から2番は漆原英子の作品です。

1926年生まれの漆原は、1950年代から人間と獣が渾然となったシュールレアリスム的な表現による密度の高い油彩画で注目を集めた作家です。当館コレクションには、東京都美術館時代に1966年に制作の油彩作品1点の収蔵がございましたが、2002年に亡くなるまで続けられた画業についての見直し、再評価の手がかりとして、今回まとまった形での収集をできればと考えております。

1番の「The Snow Man」、2番の「PORTRAIT」はともに1956年の油彩作品となります。

続きまして、購入の3番から6番は合田佐和子の油彩作品です。

1940年生まれの合田は2016年に亡くなっています。当館では、これまで収蔵の機会がなかった作家の一人ですけれども、2022年から23年にかけて没後初となる回顧展が開催され、その活動の展開を再検証する機会に恵まれました。その回顧展の企画を担当された学芸の方のお力添えもあり、当方でも調査させていただいたところ、幸い各年代の代表作がまだ入手可能であることが分かり、今回複数作品の収蔵案としてまとめました。

まず、3番の「寝台」は、合田が初めて油彩画を発表した1972年の個展の出品作で、これは特に何度購入オファーがあっても合田佐和子御自身が最後まで手元に残すことをこだわられた作品ということで、御遺族もその意志を汲んで適切な収蔵先にしか販売しないということを特に強調されていた1点でございます。

続きまして、4番の「おちょこの傘持つメリー・ポピンズ」は、状況劇場による演劇作品のポスター原画として書き下ろした油彩画で、合田のアングラ演劇との関わりを示す上でも重要な作品です。

加えて、5番は80年代の代表作「青いまなざし（リリアン・ギッシュの眼）」、6番は1990年代中頃の一点となります。

続きまして、購入の7番と8番は、前本彰子の彫刻作品です。

1957年生まれの前本は、ポストモダリズムの流れを汲む女性作家の一人として、1980年代初頭から注目を集め、1989年から91年に国際巡回したアゲインスト・ネイチャー展にも選ばれています。当時のいわゆる「超少女」などというカテゴライズの功罪を含め、1980年代以降の美術史を見直す上で、当館のコレクションに欠けていた存在のお一人と考えております。

また、フェミニズム的視点や手芸やサブカルチャーとのつながりといった点において、今後コレクションの中核に加わっていくであろう次の世代以降の作家作品にとって、先駆的な参照例と考えております。

前本が1980年代から手がけてきた大型ドレス作品と、2000年代のレリーフ作品という、2作品の収蔵により、コレクション展においてより効果的なプレゼンテーションが可能になると期待しております。

続きまして、9番は長谷川繁の絵画作品です。

長谷川については、1990年代半ばから展開される具象絵画の新しい展開の担い手の一人として、かねてより重要視しており、2020年度に2007年から11年にかけて制作された絵画4点を購入。2022年度には御寄贈により1995年の小品、これはショウガを描いた典型的な作品ですけれども、1点収蔵しております。

今回の収集候補作、これは発表時は無題だったと思うんですけれども、後につけられたタイトルで「法被威徳猥屠摩訶論（はっぴいほわいとまかろん）ちゃん」と読むのですが、これは1990年代後半に高さ3メートルのキャンバスに絵画のありふれた主題をあえて巨大化して描くという一連の作品を手がけている、その中の一つでございます。既に収蔵した長谷川作品と併せて展示することで、長谷川の作家性とその変遷を示すとともに、コレクションのほかの絵画作品との対照によって、「絵画とは何か」という問いをめぐるより普遍的な議論を引き出せることと期待しています。

続きまして、10番以降の購入作品は、先ほど説明がありましたとおり、今年度重点を置きました若手作家及び中堅と言ふべき実績がありながら、若手の時期には収蔵に結びつくような関わりを得ることができていなかった作家についての作品となります。具体的には、1970年代生まれ以降の世代から、議論を経て取りまとめた候補作となります。

10番になります。青山悟の作品です。

青山の作品は、主として写真イメージを工業用ミシンを使って刺繍に変換するという技法において共通しています。その中でも今回2012年から17年頃にかけて手がけられた複数作品を収蔵することで、その変遷と関心の幅を示せたらと考えております。そのうち、2014年の「Map of The World」についてこの委員会でお諮りいたします。

この「Map of The World」は、一見ただの白地図のように見えますけれども、一部に蓄光糸を使っているため、ブラックライトを当てることで意味が生成するというパフォーマンス的な仕掛けをはらんだ作品でもあります。

続きまして、11番は佐藤雅晴の映像作品「9 holes」です。

佐藤は、実写映像を基にそのイメージをトレースすることでアニメーションに変換するロトスコープという技法で知られる作家です。いずれも短いシーンのみの比較的短いフックをループで再生する、展示空間での絵画的な展示に近い映像作品になります。「9 holes」は9つの画面をそれぞれ別々のモニターで上映する映像インスタレーションとして発表したものです。

特にこの発表形式については、作家の指示書というか、指示を伝える文書があるんですけれども、ロビーを含めた様々な空間に展開すること。通常展示室の一部とはみなされないうところにもあえて分散して置くことも容認されているという点で、コレクション展示に変化をつけることも期待されております。

1973年生まれ佐藤は、残念ながら2019年に病気のため、若くして他界されております。今後作品が増えることのない中、この機に収集できればと考えております。

12番は、青柳菜摘の映像作品です。

1990年生まれの青柳や、2001年頃、つまり10代の初め頃よりインターネット上でイラスト絵の発表を始めていたという、まさにデジタルネイティブであり、ポストインターネット世代の中でも早くから注目をされてきた作家です。

「家で待つ君のための暦物語」は、コロナ禍下の12か月という時間をインターネット上のサービス等を介して集められた他者の物語やイメージの集積によって体現するものです。

この作品の納品内容の中には、インスタレーション展示の際に一緒に提示する写真作品について、展示環境に合わせて任意のサイズ、ターポリン素材などに出力するための画像デジタルデータと、小規模な展示の際にはそのまま使えるアクリルマウント済みの展示用コピーとの両方が附属されています。

続きまして、13番と14番は熊谷亜莉沙の絵画作品2点です。

熊谷は1991年生まれ、今回の収蔵候補作家の中では最年少ながら、その精緻な画力には既に十分な定評があり、個人史に関わるモチーフをドラマチックに描き出す作風で、自身の世界観を確立しているかのようにも見えます。

13番は、これまでも主題としてきた本人の祖父の姿を描いたもの。対して、14番は近年作家が興味を寄せているカトリック文化への考察が反映されたものとして、現時点での作家の到達点と今後の変化の兆しの双方をまるで2点、対作品のように体現しています。

続きまして、これ以降が寄贈作品になります。

15番は、松本陽子の東京藝術大学小磯良平研究室時代の卒業制作である絵画作品1点です。当館では、松本陽子の絵画4点、ドローイング10点を所蔵していますが、いずれも1990年代から2000年代の制作です。長きにわたる作家の活動の初期を伝える本作は、作家の活動の変遷の検証に寄与するだけでなく、横軸、つまり1950年代から60年代頃の動向や状況について、同時代の所蔵作品と併せて検証する手がかりにもなる貴重な作品です。作家御本人が大切に長く保管されてきたものを御寄贈いただく物件です。

続きまして、16番は李禹煥の2021年の近作、「応答」でございます。

本作は、2021年に国内で開催された大規模な回顧展に最近作の一つとして発表された作品の一つです。当館では、東京都美術館時代に1970年代の代表的な絵画作品を収蔵しているのをはじめ、ドローイング、版画等、折々の作家の活動を示す作品を収蔵しておりますが、80歳代半ばにしていまだに旺盛に制作を継続している作家の新たな境地を示す作品として今回の御寄贈のお話をお受けできたらと考えております。

続きまして、17番は栗田宏一の作品です。

栗田は、世界各地を訪ね、その土地の土を採集したり、小石を拾うなどのシンプルな営為を長期にわたり継続し、その行為の痕跡を作品として発表してきた作家です。本作は1988年から2002年までに行った旅の過程で採集した土を、現地のはがきに貼り付けて自宅宛に送付するという営みの集積であり、作家最初期の重要作と言えます。

次が、18番から43番一式で、松江泰治の写真作品26点です。

松江泰治は1990年代以降の日本の写真表現を考える上で不可欠な作家の一人であり、写真と現代美術の近接、あるいは越境例としても重要です。候補作品は、これまで撮り貯めてきた未発表の写真から作家自身が選りすぐり、あえて自然と都市の風景を区別することなく、相対で展示するものとして新規にプリントし、発表したものです。当館では休館中に地域との連携により実施したMO Tサテライトへの出品を機に、深川地域を捉えた、言わば地域ゆかりとも言える写真作品14点と映像作品2点を収蔵しています。それにこのシリーズを加えることにより、世界各地で撮影を続けてきた作家の活動の核を端的に示すことが可能になると考えております。

また、登録上、26点はそれぞれに番号を振っておりますが、これをまとまった数で俯瞰して見るということのある程度想定した収蔵ですので、ここからより分けることなく、一式で御寄贈を受けられたらと考えております。

44番と45番は、現在当館で個展を開催中の作家、豊嶋康子の作品です。

今回の出品作品の中でも代表作と言ってよいマークシート作品、「エンドレス・ソロバン」の2点は、今回の展示のために全面修復が行われたものでございます。当館には23点の収蔵がありますが、豊嶋の1990年から約30年以上に及ぶ活動を展示する今回の展覧会の出品作品が約500点に及ぶことから、作家の仕事の総体を伝えるには、やはり今後も複数の作品を組み合わせで紹介できることが望ましいと考え、個展開催のこの機にこの代表作2点の御寄贈を受けたいと思っております。

以上、駆け足でございましたが、概略となります。詳細は引き続き作品を実見いただきながら御説明させていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

中村文化行政専門課長：ありがとうございました。

ここまでで何か御質問ありますでしょうか。よろしいですか。

よろしければ、これから作品の実見をしたいと思っておりますので、御案内のほうをお願いいたします。

(委員離席)

(作品検分)

(委員着席)

中村文化行政専門課長：お疲れさまでした。

作品を御覧になって、何か御意見、御質問等はございますでしょうか。

神山委員：1番と2番の漆原さんの評価額についてですが、ちょっと近年の取引がないようなのですが、女性というか、力のある作家はしっかり価格によって評価するという作業も大事だと思うんですが、一方でやっぱり取引によって価格が決まっていく部分もあるかと思うので、もう少し教えていただければと思います。

学芸員：やはり残された作品がほとんどないということもありますし、またかなり以前に取引をされた、91年度ですとか、そういったかなり古い時期に取引をされた事例しかありませんでした。

神山委員：ありがとうございます。

中村文化行政専門課長：ほかに御質問ございますか。よろしければ、次に評価方法について御説明いたします。

評価表に金額を記載し、署名をしていただきます。評価額の最高価格と最低価格を除いた残りの価格の平均値を委員会としての評価額といたします。金額は税込みのもので御記載をお願いいたします。

評価方法について何か御質問はございますでしょうか。

よろしければ、お手元でございますボールペンで御記入をお願いいたします。御記入がお済みなった方につきましては、事務局が確認いたしますので、お声がけをお願いいたします。確認が終わりましたら御退席いただいて結構でございますので、本日はありがとうございました。

(委員評価表記入)

(事務局、評価表確認)

午後 3 時45分閉会

以上